

共立女子大家政 芳住 邦雄

目的 被服着用時のmicro climateの変化に関する被服衛生学的研究は、盛んになりつつあるが、macroな環境条件の変化による着装形態への影響に関する定量的な研究は、未だ、少ない傾向にある。本研究は、都市における着装形態が、環境条件によっていかなる影響を受けるかを数量的に把握することを目的としている。特に、昼間における成人男女の上着の着用実態を、気温を指標にして比較解明することに主眼をおいている。

方法 成人男女の着装形態についての街頭調査を、東京都千代田区神保町の神保町交差点周辺において実施した。信号の切り替わり時に集団となって横断歩道を歩いてくる歩行人を写真機で撮影して、着装形態を把握した。こうした操作を一回の調査につき5回繰り返した。調査期間は、1989年5、6および8月の月曜日から金曜日までのうちの延べ21日間であり、時間は、昼間の最も気温の上昇する午後2時とした。大気環境の状態を表す環境データとして気温、湿度および風速を東京都環境保全局の都庁前および文京常時監視局での測定結果から収集した。

結果 男子については、背広、ジャケット、ジャンパー等を着用しているものから着用率を算定した。女子については、より判定が困難であるが、ジャケット、ブレザー、カーディガン等を着用している場合には上着着用あり、ブラウス、ワンピース、トレーナー等を着用している場合には上着着用なしとした。その結果、上着着用率(=y)と気温(=x)との間には以下の回帰式で示される良好な相関関係が認められた。

$$\text{男子 } y = -3.99x + 143, \quad r = -0.950 \quad (n = 21)$$

$$\text{女子 } y = -4.97x + 150, \quad r = -0.815 \quad (n = 21)$$

すなわち、気温が1度上昇するにつれて、成人男女の上着着用率はそれぞれ約4および5%減少することが明らかとなった。

なお、本研究遂行には、本学大学院生内田直子、剣持久美子、竹内佐輝子の諸君の助力を得た。深謝する。